

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第5号 1989, 2, 16

発行

北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区北2西2
道特会館 NDA画廊内
電話 221-8672

本の紹介(一)

ポーランド現代史

(世界現代史 二十七) 伊東孝之 著
(山川出版社 一九八八年八月刊) 二千三百円

高岡健次郎

世界現代史シリーズ(全三十七巻、山川出版社)の一冊として、その出現が待たれていた『ポーランド現代史』が、この八月に刊行されました。著者の伊東孝之氏は北大スラブ研究センター教授。ポ文協の運営委員でもあります。十年あまり前に出た『東欧史(新版)』(山川出版)でもポーランドの現代史を分担執筆しているように、以前からこの分野の第一線で活躍している方で、最近では昨年、共編著『東欧現代史』(有斐閣)を刊行し、『史学雑誌』等で好評を得ました。

今回の新刊『ポーランド現代史』は、本文が十章に分けられています。

まず「ポーランド史の諸前提」と名付けられた第一章で、著者は、中世までさかのぼってポーランドの文化、社会、政治の特質をさぐり、十八世紀後半のいわゆるポーランド分割にも論及していますが、つづく諸章を読みすすむと、この亡国の悲運がその後の歴史に残した傷あとの深さに誰もが気づくはずで、たとえば第一次大戦後、念願の独立を回復したポーランドには、代表的三都市ワルシャワ・ポズナン・クラコフを結ぶ鉄道線もなかったという著者の指摘は、その簡明な一例を示したものと見えるでしょう。

だが本書の重点は、「まえがき」

で明記されているように、「狭義の現代史」としての戦後史におかれており、過半のページを占める第六章以下で、一九四八―四九年を画期とする「共産党一元支配体制」の確立、五六年の民主化運動を契機とするゴムウカ体制の成立、七〇年十二月事件によるギエルク政権の出現とその崩壊といった戦後史の流れが、その推移・転換を必然化した諸要因への鋭い洞察をまじえながら、くわしく展開されていきます。またこの際、五六年以降のポーランド史は国家に対する「社会の自立性回復の歴史である」という著者の明快な分析視角が、この間の労働者など諸社会層の動きを透視しその本質を引き出す上で、有効な力を発揮しているように思われます。本書が最大の力点をおいている八〇年代初頭の「連帯」時代は、この視角からみれば、社会の革命的活性化の時代であり、その中で成立した政労協定(八〇年八月三十一日)以降十六カ月わたる「グダンスク体制」は、その本質として「国家と社会の分業体制」と把握されるのです。

早くもグダンスク協定締結八周年記念日を迎えたポーランドから、「連帯」再合法化の要求などを掲げ

たストライキ等の動きが報じられ、日本でも改めて「連帯」時代の記憶と関心がよびさまされていきます。歴史が現代と過去との対話だとすれば、人びとの関心は、今日のポーランドの国家と社会の緊張関係を生み出し

た歴史的背景へと遡及していかざるをえませんが、本書は、現在わが国で最も信頼のおけるポーランド現代史として、このような真しな歴史的関心に応え、それを満たしてくれると思います。

本の紹介(二)

北の十字架 ポーランド詩集

米川 和夫 訳 (青土社 二千八百円)

先年、ポーランドの詩人ミオシユがノーベル文学賞を受賞したことは後存知の方も多いと思いますが、ポーランドでは古くから詩が文学の中でも大きな位置を占めてきました。

本詩集は、第一章がガウチンスキ詩抄、第二章ルジェーヴィチ詩抄、第三章現代ポーランド詩抄、第四章子どものための詩、第五章シヨパン歌曲集の全五章から成り、十九世紀初頭から現代に至る三十人の詩人の詩百三十二編を集大成した、わが国で初のポーランド詩集です。

訳者の米川和夫氏は、一九八二年にまだ若くして亡くなられましたが、

「ミルクなんかね ぼく みもしないから」
そんなかおした おひげのさきに
しろいしづくが
ひとつぶ。

ポーランド航空

チャーター便

のご案内

ポーランドへ行きたいので適当な航空便を紹介してほしいという事務局への問い合わせが、これまで少数ですがありました。ポーランド航空LOTのチャーター便に限り、フライトスケジュールその他に関する情報が事務局にあります。

チャーター便は年末年始、春のゴールデンウィーク、夏期の三期間に限り、全部で十五往復便でいど成田、ワルシャワ間を飛んでおり、ヨーロッパの主要都市への接続も可能です。北海道ポーランド文化協会の会員

で、このチャーター便を利用なさりたい方は、事務局までご連絡下さい。詳しい内容をお知らせします。

また同様の情報は、本会団体委員の日本通運(株)札幌旅行支社(電話 〇二二二二二二五四二二)で

も得られるはずですが。
▲一九八九年ゴールデンウィークの飛行予定は左のとおりです。

(一) 四月二十八日(金) から五月六日(土) までの九日間

(二) 四月三十日(日) から五月八日(月) までの九日間

▲接続可能都市

アムステルダム、ブリュッセル、コペンハーゲン、フランクフルト、ジュネーブ、ヘルシンキ、ロンドン、リヨン、マドリッド、ミラノ、パリ、ローマ、ストックホルム、ウィーン、チューリッヒ、カイロ、ベルリン、ブタペスト、ブラハ、イスタンブール。

原稿募集 ポーランドに関する随筆、紀行文、評論などを事務局までお寄せください。またポーランドおよびポ文協についての断片的な感想、コメント、ニュース等を葉書一枚にまとめてお送りください。締切はいつかおう三月末日といたします。

POLE 第 5 号(1989.2.16)

本の紹介(高岡健次郎)①伊東孝之著『ポーランド現代史』②米川和夫訳『北の十字架～ポーランド詩集』	1
ポーランド航空チャーター便の案内.....	2